

教化計画スローガン

真のよりどころを
明らかにしよう

高田
教区報

響流

第 発行所
109 上越市寺町2丁目24-4
号 真宗大谷派 高田教務所
編集 響流編集委員会
発行 村手 淳 照
印刷 文化印刷(株)



御修復された高田別院鐘楼

鐘楼修復となつて

高田教務所長 村手 淳 照
高田別院輪番

御流罪八百年の年を迎え、いよいよ御法要も目前に迫つてまいりました。四月十四日から十八日までは高田別院、五月二十五日から二十六日までには国府光源寺様において御流罪八百年法要を、翌二十七日には上越文化会館において記念大会を全国の御同朋・御同行とともに勤めてまいりたく存じます。併せて記念事業として、尾神嶽「報尽碑」修復事業と『尾神殉難誌』の増補改訂版の出版や記念俳句大会などを実施してまいります。

親鸞聖人は、越後の大地にあつて、流罪の身の中からお命がけの念仏を称えつづけられ、現代の私たちにまで本願念仏の教えを伝えてくださいました。今こそその念仏の道を我が道として生きていくのか、共々に確かめる時でありましょう。

高田別院では、この度の御法要をお勤めすることから、傷んでおりました鐘楼屋根の修復を依頼いたしました。昨年の院議会で承認を受け、別院特別事業基金の融通と特別寄進を賜りまして、糸魚川市の樋口工務店施工のもとで修復を進め、昨年末に完成となりました。

現在の鐘楼は、天保九（一八三八）年に再建されたものです。当時は、徳川幕府の末期に向かう中、本山の両堂・諸殿が文政の大火（四回のうち、二回目の火災）で焼失し、御影堂・阿弥陀堂が上棟したばかりでした。そのような時代状況下での建立でした。この歴史ある鐘楼も長年の風雪により、思いの外に傷んでおりました。この度、屋根組の全面改修と銅板葺き屋根並びに大棟の全面改修をいただき、別院の鐘楼として調和の取れたものとなりましたこと、偏に皆様方のご懇念の賜と厚く御礼申し上げます。

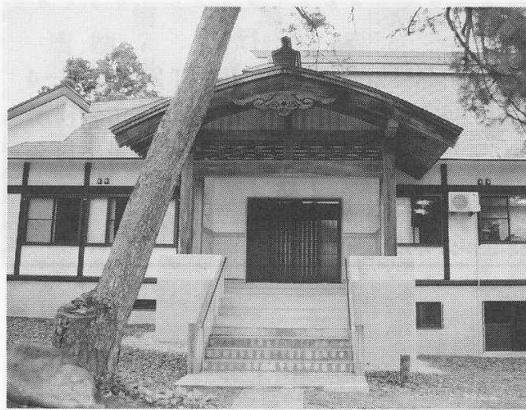
この度の親鸞聖人御流罪八百年法要におきまして、音色高らかに響き渡るものと存じます。

新井別院庫裏建設について

建設委員長 竹田 恵示

去る二〇〇一年一月の雪害により、新井別院では庫裏の屋根が破損するという事故に見舞われました。院議では当面の倒壊防止の応急措置を行うとともに、早速その復興について検討を開始しました。

新井別院は、貞享元年（一六八四）本願寺十六代一如上人により末寺を改めて本山掛所とし、上越地方の末寺を管轄せしめたのが濫觴ですが、その後、延享四年に台風で被災。寛延元年に暴風雨で本堂倒壊。明和三年に火災で全焼。天明元年に洪水で



鐘樓と梵鐘が流出。天保十四年、隣村の火災により茶所と鐘樓を残して全焼。明治十一年四月に雷火によって全焼。以上のように度々の災害に遇いながらも、その都度復興を繰り返してまいりました。

二〇〇一年に雪害に遇った前庫裏は、明治十一年九月の明治天皇の北陸巡幸の行在所に充てるため、急遽関山村の別当寶藏院の一部を譲り受けて庫裏としたものです。

そして現本堂は、本山再建と時を同じくして、明治二十八年十月に再建落慶しています。

庫裏の復興については、「新築以上の経費を要しても、寶藏院伝来の由緒の故に修復すべし」という意見もありましたが、別院庫裏としての機能や教化活動とその将来を考慮して新築することに決定。「新井別院庫裏建設委員会規則」を施行して建設委員会を立ち上げ、委員長に良明寺住職岡寺現明氏を選出。紆余曲折はありましたが、建設委員会で策定した建設計画について、別院関係機関の決議と、教区会及び本山当局の承認を経て、二〇〇二年六月に設計会社四社の中からミヤシタ設計と設計契約。その設計をもとに、二〇〇五年一月に建設業者十社の入札により信



越工業株式会社と建築契約を結びました。

そして、二〇〇六年三月、庫裏解体報告法要。四月二十日、起工式。七月三日、上棟式。十月十一日、完成引き渡し。

以上のとおり、天候にも恵まれて建設事業は順調に進みました。なお、十一月一日から別院報恩講を控えている関係で、落慶法要とは別に十月二十六日に庫裏お内仏の入仏法要を厳修しました。

お内仏は妙高市二俣の西蓮寺様から、また絵像本尊とお脇掛は糸魚川市の善正寺様からご寄進を賜りましたことは、まことに有り難いことで

ありました。

落慶法要は、本年六月二十日午前十時から熊谷宗務総長を迎えて厳修いたすべく準備を進めています。

新井別院は崇敬寺院が僅か五十三カ寺で、この再建事業には困難が予想されましたが、本山から六百万円の助成金をいただき、また高田別院崇敬区域の御寺院百九十二カ寺から特別懇志を賜りましたことは、事業推進の大きな励ましとなりました。この紙面をお借りして衷心より御礼申し上げます。

併せて、新井別院庫裏の再建にご尽力を賜りました工事関係者、新井別院崇敬区域の関係各位に深甚の謝意を表します。

新井別院は、庫裏の被災以来長い歳月を庫裏再建一筋に歩んできましたが、建設委員会発足以来、その委員長としてご苦勞をいただきました岡寺現明氏が、事業半ばの二〇〇六年三月に不慮の事故でご逝去されたことは残念の極みでありました。

なお、洪水で流失した梵鐘が新井工業団地内で発掘され、発掘者の信越工業株式会社から譲り受けることになり、庫裏落慶法要を期して本堂内に安置することを付記し、御礼芳々報告といたします。

宗祖親鸞聖人 七百五十回御遠忌お待ち受け 並びに御流罪八百年法要

推進委員会委員長　藤戸　秀庸

「よしあしの文字をもしらぬひとは
みな まことのころなりけるを」(『聖
典』P511)との領きを生み、「善悪の
字しりがおは おおそらごのかた
ちなり」と言い切つてくださる原動
力となつたのが、五年にわたる宗祖
の越後での生活であつたと思うので
あります。その親鸞聖人に「まこと
のころ」と言わしめたのが、我が
越後の人々でありました。

そして、八百年後の今を生きる私
たちがお迎えたしますのが、「宗祖
親鸞聖人お待ち受け」の一環として
の位置づけをいただいております。御
流罪八百年「親鸞の道を生きる」の
の大事業であります。恵信尼公遺徳
顕彰法要を含む御参修法要(四月)
並びに、御門首御親修法要(五月)
そして記念大会がいよいよ間近に迫っ
てまいりました。その進捗状況の概
略を御報告申し上げます。御支
援を願うことでもあります。
今回の大きな柱の一つであります

「帰敬式実践運動」であります。四
月の御参修法要におきまして、一日
の受式予定者八十名のところ、現在
(三月十三日)四月十四日は五十名
十五日は六十一名。十六日は二十七
名。十七日は百十三名。十八日は六
十名。計三百十一名となりまして、
予定受式者の七十八%になります。

また、御門首御親修によります光
源寺様会場では、受式予定者百名の
ところ、六十六名となっております。
いずれも目標値に届きますよう、ま
すますのご奨励をお願いいたします。
次に、『法要部会』であります。一
月二十七日より習礼が始まりました。
宗祖御在世の頃に誦誦されてい
たと伝えられております『往生礼讚』
が当面の内容となっております。な
かなか誦誦の機会のない聖教であり
ますが、田中圭悟さんの指導のもと、
本番に向けて研鑽がスタートしてお
ります。宗祖を偲ぶ御流罪法要にふ
さわしい勤行をめざしてのことであ

ります。

次に、『教化部会』であります。四
月の別院会場での御法話の講師方も
四月十四日は井上円師、十五日は比
後孝師、十六日は金子正美師、十七
日は堀前恵裕師、十八日は尾崎秀行
師の各師にご承諾をいただいております。
大勢の皆様のお聴聞をお待ち
しております。

次に、『参詣部会』であります。が、
御門首御親修の前日、居多ヶ浜での
参拝式では、秋山祐成さんのおかけ
で、常設の浜茶屋をお借りし、お勤
め申すこととなりました。駐車場の
問題と、降雨時の心配が一気に取り
除かれ、本当に安堵いたしました。

次に、『広報部会』については、ポ
スターも完成し、全国発送すること
で、大きな反響を呼んでおります。
広報誌『群萌』も第十号まで発刊さ
れております。『御旧跡マップ』も、
協賛枠も残すところあと僅かとなり、
一刻も早い完成配布が待たれるこ
ろであります。

さらに、『記念大会』についてであ
りますが、教区内各組へのチケット
の配布も終わり、池田勇諦先生から
は「困難か法難か」との講題をいた
だいております。交声曲(カンター
タ)「花ごぶし」は、円成に向け、宮

越勉さん、古海法雲さんを中心に日々
研鑽が続いております。

また『記念俳句大会』も、小林義
之さんを中心に、堀前小木兔先生の
アドバイスをいただきながら、応募
要項も全国各寺院へ、そして、月刊
『同朋』を通じて、同好の士へも配布
させていただきました。一人でも多
く、教区内外の皆様の、二句千円の
兼題投句をお願いします。それが
大会の運営資金となりますので、是
非とも御協力くださいますようお願い
申し上げます。

その他、『寺宝展』も、『尾神殉難
誌』増補改訂版出版につきましても、
着々と準備がすすめられております。
いよいよであります。光源寺様に
も、高田別院にも駒札が立ちました。
二月末には、全国教区会正副議長会
の場で、あらためて御流罪八百年「
親鸞の道を生きる」をアピールさ
せていただきました。

そして、三月二十六日に、御流罪
記念事業推進委員会常任委員会及び
各部門のチーフ会議を開催し、細部
にわたる確認・チェックを行います。
皆様をお迎えしたいと考えております。
皆様のますますの御協力をお願い申
上げます。

門徒戸数調査経過報告

二〇〇三年度より取り組みを進めてまいりました「教区門徒戸数調査」も、三ヶ年の協議を経て、昨年秋季に第一回の調査実施、本年一月末には調査結果公開となりました。

ご承知の通り、今調査を通して教区全体としては門徒戸数増のご報告をいただきました。今調査の実施、さらには貴重な結果を得ることが出来ましたのも、ひとえに教区内皆様のご協力の賜物であります。紙面をお借りし、御礼申し上げます。

なお、今後の予定といたしましては、まず七月初旬の「割当審議会」に調査結果を報告し、その結果を基に新年度御依頼割当基準（案）を審議・答申いただきます。次に、その割当基準（案）を「教区会」、「教区門徒会」に議案提出し、承認いただきました後は、八月初旬に今調査結果を算出基準とした御依頼割当を教区内御寺院へお願いさせていただく運びとなります。

今後も、引き続き「教区門徒戸数調査」取り組みにご理解を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

門徒戸数調査を終えて

委員長 平賀 淳

高田教区門徒戸数調査は、委員各位並びに教区内寺院のご協力で調査実施することが出来ました。また、教区内の皆さまには、各組意見聴取会等で貴重なご意見をいただきましたこと、重ねて御礼申し上げます。さて、今調査の留意点を二点、述べさせていただきます。

社会変化の激しい現状（地域の過疎過密、経済格差、市町村合併、核家族化、老人家庭など）をふまえ、ご門徒の実態把握は寺院活動の根底であると思われることから、門徒戸数については「総門徒戸数」と、実際に御依頼をご負担いただける「御依頼門徒戸数」の併記をお願いいたしました。

次に、門徒戸数調査実施に際し三原則（「自主申告の原則」・「公開の原則」・「調査継続の原則」）を定め、その原則に基づき調査実施をいたしました。当初委員会では、各寺から提出いただく報告内容の正確を期するため、門徒名簿や寺院の決算書といった添付資料提出の是非も話し合われましたが、「自主申告の原則」に反すること、門徒戸数調査は三年毎に「調

査継続」されること、「公開」がなされることから、今調査ではどこまでも各寺からの報告を重んじることといたしました。

以上、御礼とご報告を申し述べさせていただきますましたが、三年後の継続調査の際にも、教区内皆さま方のご理解とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

三十年の時をへて

副委員長 杉田 弑恵

今回、漸く門徒戸数調査が実施され公開にまで至ったことは、準備委員会から数え三年という歳月の間、慎重に協議を重ねて来た結果であるとともに、宗門世論も門徒戸数調査実施を求める段階にきていることがあつたと言えるでしょう。当教区でも過去にこの問題に取り組んだことがあつたのです。

昭和五十年頃（酒井恵照所長）の時です。先の「宗祖七回御遠忌法要」後、同朋会運動が始まり、同四十七年には十周年を迎え「総括と点検」が声高に叫ばれました。そんな折から信仰運動が先行し、財政面が軽んじられていた面があり、教財一如でなければということで、財政の基盤である門徒戸数が不確定では砂

上の楼閣であるから、この調査を実施せよとの強い声を受けて行ったものです。

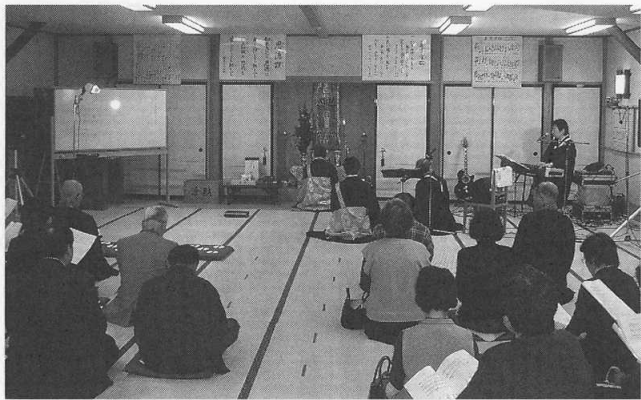
当教区では各組より一名の委員を選出し委員会を立ち上げ、隔月に会合を開き協議されたことです。しかし、その頃はまだ他教区にも例がなく、暗中模索していたところでした。それでも、次のような提案がなされました。宗教法人法上も必要であるので、門徒名簿を本堂に掲示していただき、その数を報告していただく。総代はご門徒の数を把握しておられるので住職と連名での報告を願うというものでした。しかし、結論には至らず三回程で自然消滅になったのです。このことから、宗門・教区の財政基盤確立のために、門徒戸数を把握しようという動きは、当時からお願いであることが窺い知れることです。

このたび、三十年の時をへて、当教区において門徒戸数調査実施まで成し遂げられたことは、教区内皆様の御理解と御協力に依ることとあります。感謝申し上げますと共に、本調査は「三年毎の調査継続」を原則としておりますので、今後の調査にも変わらぬ御協力を賜りますようお願いいたします。

第8回東本願寺池の平青少年センター報恩講が勤まる

去る十一月十四日・十五日の日程で、池の平青少年センター報恩講を厳修させていただきました。

今年より、青少年センター準備室の協力で、池の平センタースタッフの一人である永寶晴香さん（三条教区）からも協力いただきました。ここに参加しての感想文を掲載させていただきます、報恩講の様子を紹介させていただきます。



法要には、近藤龍麿氏と天白真央氏をお迎えし、ギターとシンセサイザーを音源に音楽法要でお勤めをした後、ライブを拝聴しました。

ライブでは、ギターとシンセサイザーの音に乗り、歌によって届けられるメッセージが、私たちに今日までの自分を振り返るきっかけを与え、明日への一歩を踏み出させるような力があつたと感じます。

法要後には、スタッフ含め計三十七名の参加者全員で、当日の午後から岩崎正一さん・美好さん夫妻が作ってくださいった手打ちそばのお齋をいただきました。

心のこもった美味しい手打ちそばと手料理をゆつくりといただき、参加者どうしでの会話も弾み、充実したよい時間を過ごすことができました。

御参加、ご協力いただきました皆様には厚く御礼申し上げますとともに、また来年もお会いできることを願っております。

最後になりましたが、初めてスタッフとして参加させていただいた私の個人的な感想を少し……。参加者の方々には、遠方からの方や毎年必ずお参りされる方、また深く悩みを抱えておられる方、年齢も性別も境遇

も様々です。事情は一人ひとり違っても、仏様の教え、そして生身の人に遇いたいと願って、青少年センターに足を運んでくださるその根本の要請は一緒なのだと感じました。参加者の皆さんの姿に、報恩講をご縁に今ある自分を見つめ直すことの大切さを教えられたように思います。

また、このような形式の音楽法要は初めての経験でしたので、電気的な音と声明の融合に最初は少し戸惑



いを感じながらお参りをしていました。本来の人の声だけで勤める声明には、やはり長い時間をかけて私たちの先輩方が守ってきた歴史があり、その素晴らしさは何ものにも替えがたいと思っていますが、逆にこの斬

新とも言える音楽法要のかたちに今回遇ったことで、聞き慣れたものに固執している自分も発見できました。青少年センター報恩講をご縁に、今日からの日々、今ある自分を問い直してみたいと感じております。

身近な楽器を用いて、自分が体得したものを表現し、伝えていくことを実践しておられる講師のお二人の姿勢には大変感銘を受けました。貴重なご縁をいただいたことに感謝いたします。

(三条教区 永寶晴香)



寺院クローズアップ

今回は、真宗大谷派の寺院では新潟県の最も西に位置する第1組大雲寺さまをお訪ねしました。

大雲寺さまに伝わっている『見真大師御草枕御旧跡 飛龍山大雲寺略縁記』によりますと、



当山の開基俗姓は正五位下前の若狭守右近太夫平宗輝といい、外波村の庄司神職であった。仔細あって大文字屋右近と称していた。承元元年、流刑にあわれた親鸞聖人一行が波風が強い荒磯の越路の浜にさしかかられた。この海岸は白波

が断崖絶壁の岸にたたきつけ、鳥も飛ぶのをやめ猿も転び落ちると言われる大難所である。師弟三人が往つ戻りつして大変難儀をしていたところに、一人の里人が聖人の前に忽然と現れ、一行の道案内をした。

聖人が「あなたは何処の人かは存じませんが、我等は都洛の者でありまして念仏の教えを広めたことが罪となり、国府の地へ行く落行者です。この難所ですらうして良いか分からず困っておりますので、あなた様の情の袖におすがりしたいのですが。」と申されますと里人は「私はこの先の里に住むたちすくみと申す者でございます。あなた様がこの地へおいでになられることを知ってお迎えに参りました。」といい、親不知の難所を首尾良くお送りし終わって姿が見えなくなつた。師弟三人は不思議に感じながら足を進めると程なくして外波の里に入られ、どこかに宿をお願いしようと思つたがなかなか泊めてくれるところがなかった。聖人は大文字屋という家の庭にある大石に腰掛けて生まれ、お弟子の西仏房に宿をお願いさせ、この難所であつたたちすくみという里人との不思議な話をされた。これを聞いた右近太夫は、自分の妻のお内仏の名がたちすくみ

如来ということに気づき、仏壇を見たりと、いつも安置されているお壇より下に降りて背中を向けていて、その御足はぐつしよりと潮で濡れていたという。

もし、このたちすくみ如来さまがお助けしてきたのであれば、これは大変な方々であると思ひ、直ちに中へご案内し宿をさせていたのだ。そしてその夜、終夜を通して、濁世末代の凡夫には如来大悲の深く在すことを聖人からお聞かせいただいた。翌日、聖人がご出発される時に十字の御名号を賜つた。



たちすくみ如来



親鸞聖人 親不知通行の図

と伝えられている。大雲寺さまには御旧跡として、たちすくみ如来の他にも、竹布十字名号、善導大師半金色御影、琢如上人御消息、御手ふき名号、旅立御真影、等々多くの宝物が所蔵されています。



旅立御真影



顯如上人



御手ふき名号

◆ところで、ご住職は近年入寺され
たそうですが……。

そうですね。住職として寺に入って
二年になります。

私の母は先代の住職、平宗忍の姉
つまり先代住職は私の伯父に当たり
ます。



宮原一人氏

私の父は台湾で布教師をしていま
して、私は昭和十五年、台湾で生ま
れました。終戦後、台湾を引き揚げ
てきて、しばらくはここ大雲寺でお
世話になっていました。私は妹二人
の三人兄妹の一番上です。

祖母に一番可愛がられた一番下の
妹（節さん）は高校二年のときまで
この地にとどまっていたのですが、そ
の後親元である八幡に帰りました。
おそらく伯父夫婦は、末の妹を養女
にもらって寺を継がせたいと思っ
ていたのでしょう。

それからしばらくして、『越後、筒
石、親不知』という映画（出演者…

三國連太郎、殿山泰司、小沢昭一、
佐久間良子等）が、ここ大雲寺を宿
舎にしながら撮影されました。その
時に住職の平宗忍は三國連太郎と親
しくなり、その後、三國連太郎が『白
い道』という映画を創ったときにも
住職の平宗忍がいろいろとアドバイ
スをしたということです。

そのような縁があつて、あるとき
住職が小沢昭一の『ご対面』という
番組に招待されたことがありました。
その時に末の妹（節さん）が一緒に
ついて行ったのがきっかけで、その
番組のディレクターと結婚してしま
いました。

寺を継がせたいと思っていた妹が
嫁に行ってしまったおかげで私（宮
原一人氏）が寺を継ぐ羽目になっ
てしまったのです。

私自身も寺を継ぐ気持ちになかっ
たのですが、先代の坊守（平宗忍氏
の奥様）が亡くなって約十年がたつ
たあるとき（平成十年頃）、伯父さん
の様子を見に来たのですが、庫裏も
相当傷んでおり、伯父さんの健康状
態があまりにも悪くなっているのを
見て大雲寺を継ぐ決心を固めること
になった訳です。

その後得度し、居住している所沢
と大雲寺とを行き来して何度かは一

緒に法事や葬式をしましたが、お寺
の実務を引き継ぐことはほとんどで
きませんでした。

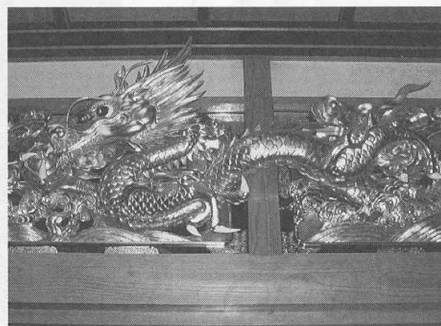
その当時、不動産会社に勤務して
法律関係の仕事をしていたので、東
京の真宗会館で行われていた土日・
土日の合宿で半年間受講する長期講
習コースを受けて教師検定を受検し
ました。それまで専門にしていた法
律関係とは全く違う考え方をしなけ
ればならないので、かなり苦労した
記憶があります。

◆大雲寺さんは、ずいぶん大きな災
害に遭われているとのことですが。

昭和十五年に国鉄の蒸気機関車か
ら出た火の粉が民家の木々端葺きの
屋根に飛び火したことが原因で、外
波の村がほとんど全域焼失した大火
があつて、その時に大雲寺も全焼し
てしまいました。その時に寺の大切
な宝物等もいくつか失われているよ
うです。

それからは仮御堂を建てて寺とし
ての働きをしていたのですが、昭和
四十四年に鉄砲水による大水害があ
り、これまた村全部が土砂に埋まっ
てしまうという状況で本堂・庫裏と
も大きな被害を受けました。
それから復興しても仮御堂であるこ

とに変わりありませんでしたが、昭
和五十四年に現在の本堂が完成し落
慶法要を営むことができました。
本堂の欄間はその時に創られたもの
です。



柱またぎの龍

この欄間は柱またぎの龍といつて、
このあたりではほとんどない形式の
ものです。先ほど申しましたとおり
昭和十五年に本堂が焼失したわけ
すけれども、その時一緒に焼けた欄
間が柱またぎの龍だったわけです。

先代住職（平宗忍氏）が、記憶を
たどりながら、古老の話を聞きなが
ら私財を投げ出して完成させたと聞
いています。

先代住職は、大雲寺を受け継いだ
ものとしては是非とも復活させたかっ
たのではないのでしょうか。

参加者のひろば

後期教習を終了して

第六組法林寺門徒 倉重 和夫

私は長男を亡くして五年になりま
す。私の生涯における最大の不幸な
出来事であり、一時はショックをか
くしえない状況でした。しかし何時
迄も失意の底に沈んでいるばかりで
はなく、ブツダの教える「生老病死」
の意義を充分にかみしめて、残った
私たちが家族がよく生きるために仏教
の可能性を探すことが「仏」への供
養になるものと信じ、今回の真宗本
廟での後期教習に参加させて頂きま
した。今回の上山では加えて「帰敬
式」を受式し、法名を名告り、苦惱
の多いこの世を生き抜く力を与えて
頂きました。

現在の心境としては、仏弟子とし
て親鸞聖人の「本願他力の念仏」の
教えにみちびかれて、さらにこの教
えに耳を傾け深く理解できる様、問
い尋ねてゆくことを人生の目標とし、
毎日を充実した日々にしたいものと
願っております。

この度は、厳寒の京都真宗本廟で
の修行であり覚悟して参加しました

が生活環境は極めて爽やかで、その
中においても厳しい生活規範のもと
御真影の御前にてその教えを戴き、
また同朋の皆様方と心あたたまるつ
ながりを確かめ合えたことは真に貴
重な体験でした。

心から御礼申し上げます。

養成講座に参加して

第十一組添景寺門徒 小熊 紀義

親から家の宗教は浄土真宗である
ことは聞いて育った。しかし教えは
何かも知らない自分自身でした。

そんな自分に推進員養成講座への
参加を打診されたとき、少しでも教
えを理解することができ、またお内
仏の作法を子に伝える手助けになれ
ばとの思いから参加致しました。

最初の講座では、正信偈、念仏・
和讃の練習。回を重ねるごとに講座
内容も深化し七回の講座が終了。

上山研修は十一月三日から五日ま
での二泊三日。総勢二十七名。

途中、事故渋滞に遭遇し予定到着
時刻より大幅に遅れ、慌ただしく同
朋会館に移動。館内の指導は、奥羽
教区の小谷明補導。会館内での生活
の在り方等について指導を受ける。

食事では食前・食後の言葉を通し

て、食材の命が今日あることを知り
ました。

諸殿拝観。また工事現場視察では
規模の大きさに一同驚嘆。

厳粛な雰囲気の中で举行された帰
敬式。参加者で作成した宣誓文の読
み上げ。続いて法名伝達式。一同身
の引き締まる思いで感激。

研修を通して仏門の一端が理解で
き、また自身を見つめ直す貴重な体
験であり、今後に活きる上山研修で
した。

推進員教習に参加して

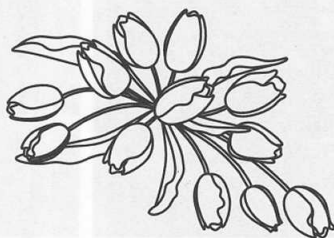
第十二組徳生寺門徒 石野 公一

昨年十月二十八日早朝、われわれ
推進員受講者は講習の最後に、三日
間の日程で本願寺に上山。阿弥陀堂
で正信偈を全員で称し、法話を聴き、
帰敬式を受け、法名をいただく。初
めての経験であらためて身が引き締
まる思い。講習の最後は推進員とし
て今後の生き方など、阿弥陀様に誓
う宣誓文を全員で作成し阿弥陀様の
前で宣誓する。この宣誓文の朗読に
光栄にも指名された。間違えずに役
目を果たす自信はあったが、後ろめ
たさもあった。宣誓内容を真正正銘
実行できるか。「言うは易し、行うは

難し」である。宣誓文を読み始めた
とき、足が震え始めた。下腹や足に
力を入れてはみたが震えはとまらな
い。皆の前だからあがってしまった、
というわけではない。阿弥陀様に心
の中を覗かれ、その怖さで震えがき
た、そんな感じであった。これが阿
弥陀様の力なのか。ショックを受け
たが忘れられない体験をした。

本山の 阿弥陀の前に 足震え
愚かなわれの 自惚れを知る

宣誓文に書いたように、ありのま
まの自分を大切にしようと思う。



「えんの会」

委員長 直江 俊子

男性・女性によって構成する宗門という課題については、宗派における「女性室」等の取り組みを受けて、教区においても課題となっており、坊守会や女性の中から要望があり、同朋として共に生きるという願いのもとに二〇〇四年に「男女共同参画を考える準備委員会」として発足し、回を重ね、二〇〇六年「えん(縁・円・炎)の会」として命名し、活動、学習して参りました。

私たちは宗門・社会にあっても、男性・女性としての役割分担を固定化し、お互いその領域の中に座り込んでしまっていることが見えてきました。人間という関係を生きる存在として互いを「同朋」として見出し、いける関係を生きたいと強く願っております。

「えんの会」を紹介を致しますと、構成するメンバーは、住職・坊守・門徒・教区会参事会・教化委員会幹事会・教区門徒会・推進員協議会・青少年部門・同和協議会等いろいろな所から男性・女性合わせて十八名です。ほとんどの組から出ております。いままで、「女性室」のスタッフか

ら提言をいただいたり、自らの問題を出し合いながら論議を重ね、十四回の会を持ちました。

男女共同(平等)参画については組織改革と意識改革が必要であり、教区会・組会へ女性参加をはかっていたい。また、各寺の役員に女性を登用し、組門徒会へより多くの参加をはかりたい。教化委員会に以前より女性が増えてきているが、もう少しの増員を希望したい。

意識改革については、男女の立場が逆転するのではなく、お互いが認め合うことが大事である。女性が研修会に出にくい状況にあり、周りの理解と協力体制が要る。個人人の意識改革の中で問題点に取り組んでいくべきである。

まだまだ多くの問題点があります。少しでも前向きに克服できるように自らも学習を深め、見直し、取り組んで参りたいと思います。

親鸞聖人御流罪八百年のこの年に女性室公開講座「男と女とのつながりの中から―恵信尼と親鸞の生き方に学ぶ―(講師・梶原敬一師 六月九日(土))を高田別院で開催いたしました。広くより多くの方々に参加していただき、教区や組、全寺院、全門徒までメッセージを発信していき

いと思います。

「同和」協議会公開学習会

第五組善正寺 大場 正信

毎年恒例の高田教区「同和」協議会公開学習会が十月十九日、十一月七日、十二月十二日の三回に渡って行われた。

この学習会は、一年一度の教区「同和」研修とは別に開催されているもので、今年度が四年目である。それまでの教区「同和」協議会学習会はテキスト・資料集の輪読、ビデオ学習等であったが、「講師を招いての学習会にしたい」という意見が多く、正式に予算化されたものだ。同時に「公開されたほうがよい」という声があがり、「同和」協議会会員への案内とは別に全寺院への案内もされている。

さて、今年度の講師は昨年度に引き続き佐藤泰治師(新潟県人権・同和センター研究委員・事務局幹事)をお招きした。十月十九日は新潟県の被差別部落の特徴を中心に講義をしていただいたが、四時間ほどの講義時間では豊富な資料を消化しきれず、受講者の中には「よくわからぬ」といった表情の人も見受けられ

た。先生もその事を敏感に感じ取られたのだろう。十一月七日には資料をやさしく作り直してきてくださった。講義のほうも所々に笑い話を交えながら、「差別とはなんなのか」といった基本的なことをわかりやすく話してくださった。そして十二月十二日は差別戒名(法名)という私達僧侶の差別の原点ともいえるべきテーマの講義をしていただいた。先生は合計六十七枚もの写真等をパソコンを通してプロジェクトに映し、墓石・過去帳等に見える差別戒名(法名)を説明された。生々しくショックな事ではあったが、学習会参加者一同、宗教者の差別というものに脳裏に焼き付かせた事であろう。

このように、有意義に行われた「同和」協議会公開学習会ではあるが、教区内において、「同和」問題を学習する事を「私はもう卒業した」と考えているような方々もおられるようである。「同和」問題を自身の問題として捉えて、高田別院会館に足を運んでいただきたいと思う次第である。また、教区「同和」協議会の名称変更問題(「響流」百八号、「私の視点」にて井上博氏が既報)についても皆様のご意見をお聞かせいただきたい。

年	一
少	キ
青	ス

児童冬の集い



楽しかったスキー教室

上越市(小二) 瀬戸 智広

二月十八日土曜日天気晴れ、じどう冬のつどいに行きました。池の平スキー場でした。ぼくは、ちようつきゆうだったからこわかったけど、やっていたらなれてきました。とちゅうからは、カプセルリフトにものりました。すごく楽しかったです。

夜はカレーを食べました。とつてもおいしかったので三回もおかわりをしました。そして、二かいでは、ゲームやお話を聞いたりしました。今井くんのけいたいの歌も聞かせてもらいました。すばらしい一日でした。

「また明日もすばらしい一日になれ」といのつたらすばらしい一日になりました。つぎの日は、三ばんに入りました。前の日にお姉ちゃんとおぶつたて足をひねったからこんどは、ぶつからないと思ったら、だいじょうぶでうれしかったです。昼食は、ベルニナで「天ぶらそば」を食べました。そして午後からは、四人のり

のリフトがあるうら道に行きました。そこは、とつてもきゆうでこわかったけど、やっていたらなれて、じょうずにすべれるようになってきて、うれしかったです。

とつても楽しい二日間でした。また、来年もさんかしたいです。

初めてのスキー

スタッフ 永野 雅之

二月十七日から十八日の「児童冬の集い」で、人生初めてのスキーを体験しました。

私が生まれた地方では、雪が少なく積むこともほとんどありません。そのため、これまでスキーをした経験がありませんでした。また、上越に住んで二年になりますが、雪の多さに驚くばかりでスキーには思いがいたりませんでした。

そこで今回、雅楽の稽古でお世話になっている林正寺の古海氏がお誘いくださり、この集いに参加することとなりました。

集いには十七名の子どもが参加していました。皆スキーをした経験があり、全くの初心者は私一人でした。初心者ということで、スキー板を歩いて歩く練習から始まりまし

の後、「ハ」の字で滑る、左右に曲がる、停止など一通りのことを習いました。それからリフトで上に行き実践へと進みました。

スキーをする中で難しかったことは、ブレーキをかける、停止する、曲がるの三つでした。これらがなかなかできなかったので、加速しすぎたり、障害物にぶつかりそうになる時は、ただこけるばかりでした。

人が滑っているのを見て、「ハ」の字でゆっくりと進んでいるのは不思議でした。自分でやつてもスピードがほとんど落ちないからです。

どうしたらブレーキがかかるのか。滑るうちにわかったことは、足の内側を立てるとブレーキがかかるということです。普段の生活の中では行わない体の動きなので、なかなかわからない体の感覚でした。

停止は最後の方になってなんとなくできたようでした。しかし、足をそろえて止まれず、不自然な体勢で止まってくれる、という感じでした。

曲がることに関しては、体の重心移動の感覚がなんとなくつかめました。最後の方では、自分の行きたい方向へ行けるようになりました。

初めてのことでだったので、色々教えていただいても、実践することは

難しかったです。滑ってはこけるの繰り返しでした。それでも二日間ですキーの楽しさがわかってよかったです。またスキーをする機会があれば、今回のことを思い出しながら、上達できればと思います。

今回、この集いに参加させてくださり、ありがとうございました。スタッフ、児童の皆さん大変お世話になりました。

年	一
少	キ
青	ス

センター スキー教室



頭でつかちの私とスキー教室

大塚教区第17組圓超寺門徒 吉安 洋

このスキー教室への参加を決めたのは、地元のお寺さんの老泉さんに誘われたからだ。日頃、家からあまり出ない私に、何か趣味を持つたらどうかとアドバイスをいただいていたことがあって、その気になった。講師の先生に教えていただけのも魅力でした。

本来なら、老泉さんと二人での参加となるはずだったが、老泉さんの腰の具合が悪く、私一人での参加に



なってしまう。今まで休みの日に、私のお話をよく聞いてくださった、体を休ませる時間を私が取ってしまったことが悔やまれる。人生の意味、本当のことは何か、頭の中が混乱して、夜眠れなくなり、体もおかしくなって仕事をやめ、とうとう家に閉じこもってしまった私が、真宗の教えに出会い、お寺さん輪読会に参加させてもらうようになって一年以上になる。毎日、お朝事にも通わせてもらった。そのうちに、地域の方々ともあいさつを交わしたり、自分の家の畑仕事を手伝ったりできるようになった。

岐阜から池の平まで、高速道路で五時間。運転の疲れを残しながらも、第一日目のスキー教室に参加。講師の古川先生は根気強くていねいに指導してくださった。そのアドバイスを受けて、自分のくせを直そうと努力した。板の上に体の重心を定めて、左右交互に踏んでいくこと。板にのっている感じが出てくれば、その方が疲れずに楽にすべることができる。そのことがわかってきたのが、二日目の午前のすべりだった。これか。よいいけるぞ。そんな思いが上がりがいけなかった。午後のすべりでアクシデント。頭から転倒し、顔を強打した。気がつくともゴックルと眼鏡がずれて、中まで雪が入り込んでいた。コースのふちに寄って眼鏡を確認すると、フレームはゆがみ、右のレンズがすっぽりとぬけてなくなっていた。転んだ場所を振り返って探しに行ったが、見つけれなかった。ここはきっぱりあきらめて、センターに戻り、調理担当の岡田さん（池の平青少年センター用務員）に眼鏡店へ案内していただき、眼鏡を新調した。

温泉も館内の手作り感覚の雰囲気もホッとさせてくれた。食事もおいしい。周りのすべてが私に立ち上がり、と励ましてくれていた。

東部地区共学研修について
 第十一組 重寺門徒 保高ヒデ子

東部地区教化連絡協議会を見直す検討会の中で、様々な立場の人から意見をきく必要があるとの提言がなされ、それに基づいて推進員の女性も参画することになり新しい部門編成がなされた。共学研修要員として全く理解のないまま、戸惑いながら初めての委員会に出席した。共学部門のあり方について説明があり、まず協議事項として、魅力ある研修として計画していくためには、今求められている研修、必要とされている研修を見極めなければならない。

また寺族と門徒との間に知識や意欲の差があるので一緒に研修を重ねていくには、基礎的、基本的な学習が望まれるのではないか。最終的に基礎から学び直す場として検討の結果、三年かけて真宗の教えと宗門の歩みを学ぶことになり、テーマはあまり堅苦しくせず、「親鸞さんに出会う」とし、佐々木正師を講師に迎え



四回二年で学ぶことになり、研修の進め方等検討のうえ役割分担をして進めた。二年間を通じ教えきれないほどの尊い出会いと、貴重な体験をし、多くの方達に研修に参加していただき、役員の一員として共に学べたことに感謝したい。この研修の体験を生かして、より多くの方に真宗の意義深さを伝えてゆくことが私達推進員の使命ではないのだろうか。深く感じ、また自分を見つめ直す機会でもあったと思っている。

まだ二回の研修があるが、しっかりと精進しようと思っている。

二〇〇六年度宗派経常費完納寺院

二〇〇六年度宗派経常費(相統講金・同朋会員志)を御進納頂き誠にありがとうございます。

ここに、年末完納いただきました御寺院名を御披露し、御礼にかえさせていただきます。

第2組 恩敬寺

第3組 明了寺 禮信寺 應満寺 淨念寺 (一カ寺)

第4組 西勝寺 常見寺 慈圓寺 養性寺 當正寺 正行寺 隨念寺 持專寺 淨善寺 皆順寺 敬音寺 願淨寺 (十二カ寺)

第5組 西榮寺 林覺寺 覺真寺 (三カ寺)

第6組 常敬寺 長圓寺 西光寺 最賢寺 (四カ寺)

第7組 妙行寺 明福寺 極生寺 開稱寺 速念寺 專念寺 唯念寺 西蓮寺 (八カ寺)

第8組

泉光寺 明岸寺 蓮淨寺 覺願寺 常光寺 本覺坊 願立寺 明善寺 (八カ寺)

第11組

圓重寺 西玄寺 實惠寺 友岸寺 添景寺 法善寺 通願寺 (七カ寺)

第12組

專徳寺 法西寺 善徳寺 徳藏寺 光善寺 養善寺 光圓寺 教念寺 西忍寺 性徳寺 敬泉寺 徳生寺 敬徳寺 (十三カ寺)

第13組

榮恩寺 龍覺寺 福淨寺 光徳寺 了蓮寺 照專寺 正行寺 聞名寺 本善寺 啓明寺 願念寺 (十一カ寺)

(二〇〇六年十月十一日)

〜(二〇〇七年一月二十二日)

以上 七十一カ寺

●おくやみ申し上げます

ご生前のご功勞を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

第2組 通託寺前坊守 田中 薫子

第7組 皆遵寺住職 草間 大道

第7組 照光寺住職 古見 惠純

第7組 法泉寺前住職 虎石 惠順

第7組 光源寺住職 山崎 順正

第7組 明福寺坊守 白鳥 芳江

第8組 慈圓寺住職 矢島 大道

第13組 光遍寺前坊守 藤枝 キヨ

●おめでとうございます

◎住職就任

第3組 淨福寺 沼川 力

第7組 皆遵寺 草間 悟

第7組 正教寺 宮尾 慈

第7組 照光寺 古見 豊

第7組 光源寺 山崎 正悟

第8組 常光寺 堀川 賢

◎得度受式

第7組 善性寺 朝日 康隆

第8組 願立寺 草間 洋文

第11組 敬覺寺 白露 宏海

(二〇〇六年七月一日)

(二〇〇七年二月二十八日)

◆編集後記◆

「今年はセンターの中から車が見えるね。」児童冬の集いに参加した子どもの一言だ。たしかに昨年と比較すると雪の量の違いをはっきりと感じる。TVの報道でも「暖冬」が取り上げられ、番組の特集で雪の比較をする時に必ずといっていいほど、新潟県が映される。それと同時に「地球温暖化」がクローズアップされる。我々が「温暖化」ということを意識し、気を付け始めたのも、ここ十年くらいのこと、それまでは「ああ恐いわね」と言うだけが現実の姿であったが、「温暖化」ということが本格的に見えてくるようになって、一人一人の環境に対する意識もだいぶ高まってきていることも事実であろう。普段の生活での何気ない一言が、大切なことに気付くための大きな一歩になることがある。青少年スキーで出会った言葉も私にとってはその一つだ。

我々の真実を見る眼というものが、いかに開かれていないのか、そして、問題を他人事とせず、いかに自分事とするのかということが、現代に生きる我々の問題となっているのではないだろうか。(内山)

